

2/24 分科会 2 -

テーマ：推進組織や地域コーディネーターについて：

参加者：

南紀・熊野地区（和歌山） 岡（和歌山県）/橋川（三重県地域振興プロデューサー）  
飯田地区 竹前（飯田市）  
裏磐梯地区 高橋（北塩原村）  
コーディネーター 小林（(財)日本交通公社）

小林

- ・推進組織は地域によって異なる。
- ・地域振興コーディネーターとして、急遽分科会 1 から三重県の橋川さんにご登壇頂いている。
- ・まず和歌山県の岡さんから若干活動をご説明お願いします。

岡

- ・和歌山県では、エコツーリズムの推進組織やコーディネーターはまだおらず、これからの問題になると思う。環境部局の担当になるが、縦のラインの中で私ども関わる事になった。橋川さんからご紹介頂いた方が参考になると思うが、何もやっていないという訳ではない。ほんまもん体験のインストラクターとして 200 人近く育成しているが、なにぶん私が直接担当でない。

小林

- ・山梨県では日本で初めて旧来の観光課と自然保護部局を統合して観光部を設立した。和歌山県でも方向としてはあり得るのではないか。
- ・橋川さんは専任のプロデューサーで、公募による 5 年契約の 3 年目とのことである。

橋川

- ・和歌山県は熊野三山や温泉地といった資源を有する。紀勢本線や国道 42 号線の整備に伴って観光ブームがあり、観光地が形成された。三重県の紀南地域はそのブームに乗って観光を志してきた。観光のエコ化の機運が高まっている。エコツーリズムの推進が活性化の起爆剤となると考えている。変革を志すには良い関係を保ちながら考え方を改めて方向性を示す必要がある。調整の為には方向性を示すことも必要。
- ・紀南の文化をインタープリターが理解する事により、文化の普遍的価値を見出し、現代的意味を与える事によって自然や文化の保護・自然につなげていく。
- ・推進手順としては、目指しているものを明確にするための理念の確立・普及を図り、プロのガイド養成、インタープリテーションの後、運営組織を設立し事業化につなげるといったことを考えている。
- ・役割として、リーダーシップを発揮しながらサポートする、夢を与えると同時に安心を与える、大義を示すと同時にゴールも示す、客観的立場と主観的立場の使い分けといった考え方が必要。
- ・私見としてプロデューサーはあくまで現場主義であるべきであると思う。真実の在処、つまりアイデアや知恵は一般市民の生活文化の中にある。

小林

- ・地域の情報はどのように掘り起こすのか。そしてどのように共有するのか。また、その際のプロデューサーの役割は。

橋川

- ・情報源は日々の会話が全てである。基本的に会議がある時以外は誰かに会いに行くという事に努めている。仕事の内容や動機等を聞くと面白い話が次々と出てくる。
- ・ただ、それをどう事業化するかはまた別の作業である。ガイドの養成講座も実施中であるが、今は基本を押さえるという段階にある。

小林

- ・変革を志しながらなおかつ上手くつきあうテクニックは。

橋川

- ・おつきあいとして処理する方法と、どちらが影響力があるかを力関係で見極めることもある。時には問題の本質をあえてはぐらかすこともあるが、その際でも自分の軸がぶれないことが必要。そうしないと交渉は成立しない。

小林

- ・橋川氏の取り組みは理念として目指すところをはっきりさせている点が特徴。その事で自然と人間の関わりを軸にするというところからぶれておらず、そこからストーリー化している。
- ・次に飯田市の竹前さん、どういった経緯で今のような形になっていったのかお話下さい。

竹前

- ・体験型ツーリズムの道のりをお話したい。長野県の入り込み約1億人のうち、中南信州500万人が訪れている。
- ・通過型観光地を滞在型にして、外貨獲得戦略を目指している。
- ・理念として、人をより良く変えていく事を掲げている。そのためには内発的な自己変革と、現場で体験する本物体験が必要と考えている。
- ・体験型観光の経緯として、H7に野外教育プロジェクトと地域資源取材、H8にプロモーション、営業活動を開始し、初の受け入れを行った。H9に施設診断事業を開始し、H10に農家ホームステイを受け入れた。H11に観光公社設立担当を設置し、H11には体験プログラム第2弾を実施した。H13にはランドオペレーターとしての南信州観光公社を設立し、H16には体験プログラム第3弾とほんもの体験フォーラムを開催した。

小林

- ・どのように発展してきたかがよく分かった。理念を明確にしている点も三重と共通している。知恵や情報は現場に落ちているという事でもあった。

竹前

- ・象徴的なエピソードとしてこのような事があった。H11年にはプログラムの中の農林業体験が入っており、東京の学校から搾乳体験したいという要望が寄せられたが、通常搾乳は早朝や夕方に行われ昼間は実施していないと回答した。その後、学校の理解を得て朝4時に実施したことがある。必ずしもきれいでない現場を見せたら生徒の反応はどうかと心配したが、真実の姿を見て喜んでいただき、酪農家も喜んでいた。

小林

- ・体験のための体験では内容が分かっしまいリピートしない。お互いに一生懸命やれば

達成感が生まれる。

- ・次に北塩原村の高橋さんお願いします。

高橋

- ・北塩原村は観光と農業が基幹産業だが、ほとんど知られていないと思う。人口 3,500 人のうち 1,500 人が裏磐梯に居住。ほとんどが観光に関わっている。入り込みは年間 260 万人だが他の事例とは桁が違う。
- ・観光基盤整備を進めてきており、トレッキングコースやビジターセンター、休憩施設が充実してきている。
- ・H12 にエコツーリズム研究会の立ち上げ、トレッキングフェスタの開催、H13 にはエコガイドなどの動きが見られ、ハードとソフトが繋がりはじめた。
- ・H15 に環境省の調査が実施され、そこでエコツーリズム入門国立公園が目標として掲げられた。
- ・推進の方策としては、エコツーリズムカレッジとシステム開発に取り組んでいく。
- ・課題としては裏磐梯地区全体に呼び込む仕組みが必要であると感じている。そのためにはまず裏磐梯を知る事が必要である。エコツーリズムカレッジはその点を目指している。
- ・H16 年度活動としては、JR のディスティネーションキャンペーン開催、商工会が観光振興講座を開催した。また、エコツーリズムフェスタの開催なども行っている。
- ・地域コーディネーターについては必要性を感じているが、指名してお願いするキーパーソンと積極的に育てていく人とがいる。エコツーリズムカレッジ等から見出していきたい。
- ・エコツーリズムカレッジは 3 つの行動、つまり学ぶこと、考えること、実践することで構成している。

小林

- ・ハード整備が先行し、ソフト整備が追いつきつつあるとの事だが、どのように一体化していったのか。

高橋

- ・トレッキングコース整備と併せてエコツーリズム研究会が組成された。また、H13 に実施したトレッキングフェスタのための実施組織が出来たことが大きい。

小林

- ・環境省と役場の連携のための組織はあるのか。

高橋

- ・推進協議会は全ての主体が加わる事になるが、全員が入ってなくても意識が統一されていれば良いのでは。

小林

- ・再び橋川さんに伺いたい。コーディネーターとしての活動の最初の手がかりはどのように作っていったのか。

橋川

- ・着任以来地元の新車で 200 ~ 300 回記事化されているので、新聞を読んでいけば私のことは知っているという状態である。ただ、端的に言って仕事ではほとんど役に立っておらず、知っているというだけ。結局 1 対 1 の話でしか地域づくりの情報交換はあり得な

い。

- ・最近もリーダー養成講座の開催が新聞に載ったが、参加した住民はほとんどが何らかの関わりがある人だった。コーディネーターが仕掛けると同じ方向性を持った人が集まる傾向にある。

小林

- ・竹前さんに伺いたい。農家ステイ 500 カ所はどのように納得してもらったのか。

竹前

- ・初めは地元のグリーンツーリズム協議会を通じて説得し、40 件から始めた。また、それまでも学生村の取り組みや国土庁の UIJ ターンの促進事業も行われていた。時期的にも徐々に農家ステイを教育旅行に取り込む魅力を感じる人が増えたことも影響した。農家ステイによって農家の横の連携が出来た事により受け入れ協議会が組成された地区もある。現在では南信州観光公社のネットワークも出来ており活用している。

小林

- ・エコツーリズムは横のネットワークが重要だが、飯田市では農政課との連携をどう取っていったのか。

竹前

- ・まず連携ありきでは上手くいかない。気が付いた所から事業を始めるのが良いと思う。最初は農政課の取り組みもあまり評価していなかったが、同じような取り組みを行政内の違う部署が行っていたので住民に対する説明の為にも連携が必要だった。また、実際に取り組むに当たってはノウハウ等の面で連携が不可欠だった。

小林

- ・三重県では熊野古道弁当というものを開発しており、これも人を集めたら出来てしまったという感じだと聞いているが。

橋川

- ・違う町村の行政が連携する動きはある。熊野古道弁当は地域内で一番良い食材を集めたもの。
- ・その中で悩んでいるのは協力して作っている商品やサービスの質をどのように高めていくかである。事業として満足するなどの実感を持ってもらう事が必要だが、現状はまだそこまでいっていない。
- ・話を聞いていると飯田市では農家に話を持っていったらすぐにプログラムになったように見える。質的な部分はどのように高めていったのか。

竹前

- ・必ずしも頼んですぐに出来たというわけではない。ただ、プログラムは進化させる事は出来る。
- ・それよりも問題はプログラムが多くなるとどうしても「こなす」ようになってしまうこと。そうすると本物で無くなってしまう。最初の気持ちを失わずに出来るかどうかが重要である。

小林

- ・プログラムを進化させる中で質も高めていくということだった。また、一度に全部を実現したというわけではないということだった。

竹前

- ・ラフティングのプログラムを実施した所好評であった。そこから広がっていった事業者も複数生まれている。陶芸についても、陶芸家の協力を得るのに苦労した。農家体験についても女性のネットワークで広がっていった。あまりネットワークを意識しない方が良いのではないか。

小林

- ・午前中の分科会でも話に挙がったが、ゆるやかな繋がりやネットワークがキーワードかも知れない。飯田市のエコツーリズム推進協議会の実行委員会は流動的に運営するようにしている。

(会場質問)

三重県 中村

- ・飯田市にお聞きしたい。ガイドや参加者の自然保護に関する考え方はどのようなものがあるのか。

竹前

- ・ガイドがいて進め方の手法がある。そこではどう参加者が変わったかが重視される。例えば溪流釣りは鳥の問題がありガイドの手法はあるが、自然保護についてはとくにルールない。そのようなルールをこのモデル事業の中で作っていききたい。もう一つ、地域で経済効果が循環するようなルールも作り上げていききたい。
- ・エコツーリズムは内なるツーリズムであると思う。外貨獲得を目指してきたが、新しいものが見えてきている。

小林

- ・地域振興と観光振興だけでは何か足りないという事だった。地域をもっと磨く事にツーリズムを活用するという事だと思ふ。最終的に住民が生活環境を守っていくことが魅力にもなるという事だと思ふ。自然体験型のエコツーリズムの先を考えているという点で日本型のモデルの先をいっていると思ふ。

田尻町 佐々木

- ・田尻でも農家民泊を行っている。現在宮城県では年に3回くらい、2泊以内までなら旅館業法の許可外で実施出来る事になっているが、それ以上では許可制になって規制がかかる。飯田の場合どういう形でやっているのか。

竹前

- ・やはり最初は旅館からクレームがでた。そこで1泊は旅館、1泊は農家という形で実施した。また、保健所から旅館業法上の指摘もあったが、設備投資が難しく、新しい取り組みなので認めてほしいとのお願いをした。その結果、宿泊として位置づけず、謝礼は農家体験に対するものとして交渉していたが、3年前に方針転換し、許可を得る方向に転換した。つまり、100㎡未満の許容面積内であれば建築確認不要ないということになり、そうするとほとんどの農家が資格とれる。消防法の問題もあったが、ちょうど構造改革特区の制度ができたので規制緩和を取る為に特区を申請し認められた。また規制緩和で客室が33㎡必要だった規制も撤廃された。
- ・新潟県では教育旅行に限ってリストを提出し、指導を受けるという事で許可が不要にな

るという仕組みのようである。そのような意味では新潟が進んでいるのではないか。食品衛生関係の許認可は各県でまちまちなので、同じような地域が声を挙げる事が必要ではないか。もちろん衛生教育も必要だとは思いますが。

徳島県 あき

- ・飯田市では行政が力入れていると見受けられるが、どの段階で地域に主体を移すのが適当なのか。

竹前

- ・行政と観光公社、観光協会の役割分担がある。公社はプロモーション組織であり、県や市の職員も出向している。観光協会は廃止してしまう話もあったが応援団として残した。自治体は基盤整備、人材育成、資源開発が役割。
- ・例えば自然保護の会は高いレベルの知識を有しているが、高齢化が進んでいる。そのようなネットワークの中でツーリズムという言葉を使ったところ、保全活動をエコツアーとして提供するという方向性が見出された。結果的に3年度にそのような意識が浸透すれば良いと思う。
- ・あまりコストはかからない。自治体からすると効果が高いと思う。

小林

- ・ツーリズムを使って関係団体がどのように組み合わせられるかが鍵となると思う。